

学級づくりのコツ

～ 課題の重い子とかわること ～

みなさん、1月9日(火)の『学級びらき』、うまくいきましたか？ 一年を締めくくる3学期です。一つ上の学年へステップアップするためにも、まとめの学期としたいものですね。

さて、今回は表題のように学級集団づくりのヒントとなるお話です。「うちは、問題(行動)が起きてないから、クラス(集団づくり)はうまくいっている。」という言葉たまに聞くことがあります。これには2つのカラクリがあります。一つは、担任に「集団を育てる」という視点が弱い場合です。集団づくりは、自然発生的にはうまくいきません。それは、あたかも羊の群れのように、「ただ集まっているだけ」と言った方がいいかもしれません。学級の子どもたちを意識的に育てる担任の支援が欠かせないのです。そして、もう一つは「集団」そのものが見えない場合です。「見ようとしていない」とも言い換えることもできます。でも、見ようとしなくても、子どもたちはいくつかの層(小さな集団)に分かれていますから、それらの関係の中で学級や学年は成り立っています。こうした関係を担任が見極め、関係性をプラスに持って行くことこそが学級集団づくりの醍醐味なんです。ちょっと難しいことを書いてしまいました。集団の構造については、SSWの先生も詳しいはずですから、機会があれば聞いてください。

いずれにせよ、「授業」(保育)と「集団づくり」(社会性の育成)は、学校教育の二つの大きな柱です。プロの教師としてどどん力をつけたいものですね。

前置きがずいぶん長くなりました。それでは「集団づくり」のコツについて書いていきたいと思います。

学級(集団づくり)がうまくいくと、授業はもちろん「もめごと」も少なくなります。また、子どもたちも意欲的になり、いろんなことに挑戦するようになります。ところが、反対にまわりだすと、それこそ下り坂を転がるように次々としんどいことが出てきます。例えば、学期末、成績つけで忙しいときに「生指」が次々と起こり、その対応に追われるというようなことです。

では、「これは危ないな。」と思うようになってきたとき、どう食い止めたらいいのでしょうか。そんな場合は、まず、学年の先生たちと相談すること。そして、フリーの先生にも話すことです。ポイントは「一人で抱え込まない。」です。小学校はほぼ全てが一人の担任で回しています。担任が学級の全てを把握し、対応しているので、『学級王国』と揶揄(やゆ)されることがあります。一方、中学校は教科担任制なので、いろんな教師が入り替わるのでそういう状況は起こりにくいです。いずれにせよ、複数の目で子どもの状況を捉えて分析し、具体的な方針を出していきます。しんどいときだけでなく、日ごろから学年で相談し合うことが一番です。そういう意味でも、学年会の定例化は大切です。できれば週1回は行いたいですね。若手の先生がアドバイスをもらうだけでなく、ベテランも「学年経営」の視点で話ができるからです。単なる行事の打合せに終わっていると、あとで学年全体がしんどくなってしまいます。また、残念ながら、学年会の案件が「行事」と「生指」、それに「授業の進み具合」ぐらいしかやっておられないことがあります。そこにぜひ加えていただきたいのが、「学級集団の様子」です。これは、担任が学級集団の人間関係図(SSWの先生がよくされる分析です。)を描いて、それをもとに説明し、他の教員が協議・分析して、学年の教職員が共通認識をするのです。これで「学年ですべての子を担任する」という認識になります。この手法は、担任の抱え込みをなくし、また、担任の精神的な重圧の軽減にもなります。1クラス30分くらいかかるの

で、1回の学年会には1クラスぐらいしかできませんが、毎週順番にまわしていくと、大きな学校でも学年がしっかり見えます。三上小や篠原小などの学年単級のところでは、複数学年を合同ですといいと思います。中学校では、生指に追われて、集団分析をしていない学年があると思いますが、教員の集団づくりの力量向上のためにも、復活していただければと思います。さらに、こうした手法は、この間いくつかの学校で起きた教員が絡むいじめ問題にも効果的です。私は、校長会や教頭会でこうした手法を何度もお話してきました。すでに実践しておられる学校では効果があがっていると思います。

さて、学級が下り坂になったとき、多くの場合、一番の対策は担任が「最も課題の重い子にかかわること」です。理由は、学級がしんどくなると、そういう子が一番に疎外されるからです。いじめの対象になりやすい子、学力のしんどい子、被差別の立場にある子、重い生活をかかえている子などです。また、よく問題行動を起こす子も入ります。そういう子は、学級の重い雰囲気を感じ取って、わざと担任の注意を引く行動をとったりします。力のある子は暴力的になったり、暴言を吐いたりします。そうした力を出せない子は、内にこもる場合が多いです。ふさぎ込んだり、休みがちになったりします。また、自傷行為という出し方になる子もあります。

それでは、こうした子どもたちにもどのようにかかわるのか？ 一番わかりやすいのは勉強です。多くの子は「ゆれる」と学力が落ちて行きます。また、もともとしんどい子は、今、何をしたいのかわからなくなります。そんな子に先生が支援をするのです。しかし、授業中の支援には限界があります。そこで、休み時間や放課後を活用します。もっと言えば、家庭訪問をして、勉強を見るのです。(ホントはこれが一番効果があります。保護者の信頼も得られ、「ダブル効果」です。)毎日する必要はありません。週に1回でもやっていくと、じわりじわりと効果が出てきます。昔は、ベテランの先生から「早よ家へ行っといで！」という声かけがずいぶんあったもんですが、今はスマートになったのでしょうか。それとも「言い過ぎたらこの先生へこんでしまう。」と心配してるからでしょうか。あまり言わなくなりました。とにかく、担任と子どもたちとの関係づくりの基本は、まずこれです。

ただし、勉強は1時間もしないこと。30分もすれば十分です。あとは学級の様子を雑談の中から聞いてみましょう。先生がそれまで気づかなかったことが見えてくるかも…。つまり、集団の状況が見えてくるのです。これが「しんどい子」にかかわる一番のねらいです。

そうして、集団の構図が見えたら、次はどうすればいいのか、その解決する方策が見えてくるのです。こうした集団を見るコツである家庭訪問や放課後の学習は、今も何人かの先生がやっています。私は大阪の中学校で「学級経営の神さん」と呼ばれていた先輩から学びました。学級経営で悩む時間があるなら、まずやってみること。重い気分も少しずつ晴れていきますよ。

3学期、新しい気持ちでスタートしました。今回は、学級を一人で抱え込まず、教職員みんなで見て育てていくためのコツについてお話ししました。『チーム学校』の一番の単位は「学年」(三上・篠原は上学年・下学年)です。2024年、みなさんとともに教育・保育にしっかり臨んでいきたいと思っています。